

令和8年度 友松会総会・研究発表会 【報告】

日時 令和8年6月28日(日) 13:30～
会場 横浜市教育会館ホール

友松会スローガン「世代もこえ つながる むすぶ 友松会」
～ 広げよう 会員のわ ～

＝ 総会次第 ＝

第Ⅰ部 総会

開会の言葉 物故会員への黙祷
会長挨拶 実行委員長挨拶
来賓祝辞 来賓紹介 会務報告
卒寿会員紹介
松沢研究奨励賞贈呈
次期総会開催ブロック挨拶
「みはるかす」斉唱
閉会の言葉

第Ⅱ部 研究発表会

発表者・講師紹介 研究発表・講評

藤馬 享 会長 挨拶 (要旨)

横浜国立大学学長並びに校友会会長梅原出様
教育学部長並びに友松会名誉会長物部博文様を
はじめ、ご来賓の皆様のご臨席を賜り、友松会
総会が開催されますことを心より感謝申し上げます。

本総会を開催できましたことは、中ブ
ロックの実行委員の方々のご尽力、そして
各支部の支部長様のおかげです。あり
がとうございます。

今、「教員になりたい」学生と、「後
輩のために自分の経験を生かし、自分もまた成
長したい」現職の先生方に対して支援をしてい
ます。その活動の一端は、「友松第116号」や
「友松会の今 Part 2」をご覧くださいと思います。

再来年(令和10年)の友松会創立140周年に向
け、本年度から友松会スローガンを、「世代を
こえ つながる むすぶ 友松会 ～広げよう
会員のわ～」としました。今、会員は、昭和、



平成、令和、各世代併せて約7000名です。横浜
国立大学教育学部で学んだという自負をもち、
同期の仲間・先輩・後輩という関係性を生かし
て、友松会と「つながる むすぶ」ことが大事
と考え、このスローガンを掲げました。

「つながる」第一歩は会費の納入だと思いま
す。一人一人が友松会や他の会員と「むすぶ」
という関係性まで高まることが重要と考え、サ
ブスローガンを「広げよう 会員のわ」としま
した。「会員のわ」は、居心地の良い、和やか
な関係性である「わ(和)」や会員同士が語り合
う意味の「わ(話)」が生まれるような活動を通
して、会員同士、そして友松会の「わ(輪)」が
広がっていくことを意味しています。

総会の後、松沢研究奨励賞A部門受賞者によ
る研究発表会があります。若手の教育実践を奨
励するB部門賞も制定しています。教育界に貢
献したいという先輩方の思いを引き継ぎ、創立
140周年を迎えたいと考えます。本年度から、
「友松会創立140周年特別委員会」が発足しま
す。本日の友松会総会並びに研究発表会が皆様
にとって有意義な時間となりますことを願い、
あいさつに代えさせていただきます。

▽来賓祝辞▽ (要旨)

横浜国立大学 学長 梅原 出 様

横浜国立大学の顔は今は台風です。本学の台
風科学技術研究センター、これは日本で初めて
の台風専門のネットセンターです。この金曜日、
この研究機関の先生が、航空機観察で台風の目
の中に入って研究して来ました。1回行けば
2つ美味しいというとても良い研究環境が金曜
日に実現したということです(註;6月26日に台
風7号と8号を同時に観測できた)。このセン
ターの長ご存知でしょうか。筆保と言います。
先ほどどなたかが、出身が地学とおっしゃっ
てましたが、教育学部の地学の先生です。また、

気象学者ですが、彼を抜擢して国家プロジェクトにつなげたということです。これは、皆さんにとっては大変なプライドではないかなと思います。私がやっているのは先生方の良い研究を大学でサポートをして 国家プロジェクトに採択いただくということです。それをもとに経営をするとで



す。法人化されて20年経っていますので昔の大学と全然違います。経営をしないとイケない。しかし、そこにあるのは先生方の研究意欲で、彼らのような研究している人をピックアップして国家プロジェクトにつなげていく。筆保先生が、がんばってくれていて、日本の顔になっています。国家の中核で働いています。教育学部の地学の先生が国家の中核で働くのもなかなか大変です。気象庁とも本学が唯一大学と気象庁が連携協定を結ぶのも横浜国大だけです。この2年ぐらいで、彼が提案した天気予報によって天気予報変わります。台風の進路がラッパ型でなくなります。そのようなことまでやっています。これは横浜国大のプライドだと思いますし、OB、OGの方にとってもプライドだと思っています。違っているのはマネタイズ(収益化)かもしれませんが、みなさんにとってみれば、私はプライドを作っていると思っています。是非、横浜国大の今後の活動に注目していただければと思っています。

大学も頑張っています。中規模大学、医学部のない中規模大学ではダントツの位置を占めています。お金で例えると、外部資金というのがあって、外部からいただくお金、今、国家プロジェクトの採択で70億円にまでなっています。国からくるお金が70億円ですからそれと同じになっているということです。学生からいただく学納金や授業料等々が50億円ですから、それよりもはるかに多くのお金を先生方の頑張りで、いただいているのが今の状況です。これでもなかなか厳しいのです。私の最後の年なので、お願いがございします。寄附を是非、よろしく願います。会場の誰かがおっしゃっていましたが、140周年といういいアニバーサリーでございしますので是非ともプライドをもってお金をい

ただければありがたいと思います。

もう一つお願いがあります。私の父親が中学校の英語の教師をやっていました。また、私には3人子どもがいて、一番下の娘が横浜市の小学校教員やっています。今、学校の現場がどれだけ大変かっていうのはよく存じ上げています。やっぱり厳しいのだなと思います。でも先生はすごく大切だと思っています。残念なことに横浜国大の教育学部は教員になる学生が50%ぐらいしかなくなってくれないという、ちょっと悲劇的な状況です。先生方の力で1人でも多くの教育学部の学生が先生になってくれるように、お声がけしていただき、特に、教育現場のみなさまであれば、例えば学生が来た時に、先生という職業は大変だと言うのはやめて、先生の素晴らしさをぜひ伝えていただきたいと思います。

日本は資源がない国、資源は人しかいないので教育者が大事だと思っています。私、強い意思でそう思っています。皆さんならできると思っています。うちの学生に会う機会がありましたら是非、先生になりなさいといっただけがあればありがたいと思います。教育学部長も頑張らなければならないのですが、皆さんに応援いただかないと立ち行かないので是非、ご協力いただければと思います。お金と先生と、この二本立てで是非よろしく願います。

今日はおめでとうございします。

横浜国立大学教育学部長

友松会名誉会長 物部 博文 様

日々、子どもの成長を支え、教育活動に尽力されている先生方に心より敬意と感謝を申し上げます。現場の先生方が協力しながら教育課題に向き合う姿は、学生にとってかけがえのない学びの機会だと受け止めています。

これからの教員養成には、大学・学校・教育委員会が連携して教員を育成し、採用後も継続して支えていくことが重要です。本学では、現在、県や横浜市と連携し、広陵高校や桜丘高校など、高校段階からの教員養成プロジェクトを進めています。さらに、今年から、県下の地域教員希望枠として37名が入学し、2年生段階から対象の



自治体でのフィールドワーク・実習などを通じて、各教育委員会の先生方とつながり教育実践力を高める取組を進めていきます。

また、友松会との連携を早期に深め、藤馬会長や現職の先生方との交流を通して学生の教職への意欲を高める取組も計画しております。

最後に二つお願いがあります。一つは、教育現場が教師にとってやりがいと楽しさを感じられる場であり続けてください。その姿は学生の教職への憧れや意欲につながります。もう一つは、若手教員への温かい支援です。教員は周囲に支えられながら成長していくものですので、ぜひ先生方のお力添えをお願いいたします。

松沢研究奨励賞贈呈

松沢研究奨励賞A部門

・平塚市立旭小学校教諭 鈴木 進

松沢研究奨励賞A部門

・横浜市立市場小学校教諭 磯野 哲英

松沢研究奨励賞B部門

・横浜市立永田台小学校教諭 前田 雄介



左より 鈴木氏 磯野氏 前田氏

松沢研究奨励賞 研究発表

〈研究発表1〉[発表内容は友松116号に掲載]

平塚市立旭小学校 教諭 鈴木 進 氏

研究主題 児童の問いから始める理科学習

(質問) 子どもの疑問が多く、扱いきれない時はどう対応するか。2つ目は、丁寧に対応すると時数が足りない場合どうするのか。

(回答：発表者) 多くの疑問に自分たちで振り返らせ、整理させるのが一つの手だ。子どもたちは結構自分たちでできる。時数も自分たちが実験方法を見通すことができるとバンバン考えを出し、実験・考察までとてもスムーズ。

講評 (要旨)

横浜国立大学教育学部

副学部長 教授 和田 一郎氏

本研究と実践は、理論と学校現場を結び付けた優れた実践研究として高く評価できる。

講評の中心は、「児童の問いから始める理科教育」の理論的価値である。

理科における「問い」は、自然事象の中に存在する様々な「変数」の動きに子どもが気づき、その変数を自ら追究したいという意欲から生まれる。例えば、植物の成長では「大きさ」や「長さ」といった変数に



着目することが問いの出発点となる。本研究は、子どもがどの変数に着目し、それをどのように問いへと発展させるのか、その過程を明らかにしようとする点に独自性がある。

特に評価できるのは、子どもが自ら操作できる変数と、その結果として変化する変数との関係を意識しながら問いを形成する授業デザインである。5年「ものの溶け方」の実践では、水の量や温度、かき混ぜ方などの条件を子ども自身が見だし、それらと溶け方との関係を追究することで、主体的な問題解決につながっていた。子ども自身が追究すべき変数を自覚した上で実験計画を立てるため、目的意識を持って学習を進め、途中で関心が薄れることなく探究を深められる点は大きな成果である。

また、院生時の「アフォーダンス」の研究も紹介された。3年「ゴムのはたらき」の授業では、子どもが輪ゴムを「伸ばす」という体験(環境)を通して復元力を実感することが、ゴムの性質を概念化する上で不可欠であることを明らかにした。本研究はその発展形ともいえる。

子どもが変数を見だし、自ら問いを立て、その解決方法まで主体的に構想することこそが理科教育の本質であり、本実践はその理想的な姿を実現していると評価できるだろう。

〈研究発表2〉[発表内容は友松116号に掲載]

横浜市立市場小学校 教諭 磯野 哲英 氏

研究主題 独自教科「鶴見ふるさと科」を通じた主体的に学ぶ子どもの育成

～子ども一人一人が自分らしく、主体的・共同的に学べる学級・授業づくりを目指して～

(質問) なぜ新教科なのか。またなぜ10時間

程度なのか。そして評価規準はあるのか。

(回答：発表者)併設型小中一貫校の取組として、総合的な学習の時間と他教科の学習を関連付けて自分たちのまちの材を取り上げ、まちの一員としての誇りをもったり、自覚のある行動をしたりする子の育成を目指した。またカリキュラムマネジメントをする中で総合的な学習の時間、社会科の時間を含めて3年生としては10時間程度が妥当と考えた。また目指す資質能力をもとに各学年で評価規準を作り「あゆみ」には書かないが、要録には記載している。

(質問)地域のことを取り上げると情緒的になりがちだが、気をつけていることは何か。また3年生「安全について」自分たちから発信するスタンスはあるのか。

(回答：発表者)市場中ブロックの地域の祭りなどが盛んなのでそれに関わり具体的事実をもとに伝えることを大事にしている。人の話を聞くだけでは情緒的になるが、発信という面では1年生へ、国語科の報告文の学習と絡めて行ったり、PTAのスクールゾーン対策会議に子どもからの意見を出したりしている。4年のお囃子の取組やポスター作りなど、ゴールはそれぞれである。

講評 (要旨)

玉川大学大学院教育学研究科

教職専攻教授 梅田 比奈子氏

鈴木先生、磯野先生お二人の提案に共通点がある。「教育は不易と流行がある」ということを感じた。「繰り返し～することで子どもたち

が主体的になっていく」、「問いが生まれていく」と言っている。そのためにいろいろな「しかけ」を作っている。確かな手だてが感じられる。

市場小は学区の工場跡地に大規模マンションがで

き1600人規模となった。新しい住民たちは地域のことを知らない。「磯野先生のふるさと科」の研究は、地域に新しくきた人が多い中で古くからいる人と共に、小中学校9年間の連続生なある学びの中で地域の一員として自覚をもち、また地域への愛情を深めてもらうことを目的とし

ている。自治会もマンションの中で完結してしまう。だからこそふるさと科で地域を知り、人とふれあう中で地域に誇りをもち地域とつながっていくことがふるさと科に込められた思いだと思う。人と人との関係が薄くなって行く中で、地域の人と人が繋がっていきこう、地域と繋がっていきこうという思いがこの中に込められている。

本実践では「地域の安全」を社会科で取り扱い、その上で「ふるさと科」でも意味をもたせている。主体的・協働的に学ぶために4つの視点があつた。①学年共通で取り組める単元構想では多人数の学年の先生が共通にできるよう考えられていた。またふれあいのために多人数の見学は難しいので出前授業が計画されていた。②子どもの日常的な学習・活動をみるでは、できるだけ操作活動を自分たちでできるように単元が組まれていた。日常的な体験を学びに生かせる声かけや発見した情報を書き込む地図などが用意されていた。③問題発見力を高めるための問いかけと資料提示では適切な場面で適切な問いかけをし資料提示を行っていた。④学びあえる集団になるための日々の取組では話し合いの中で反応したり、他者の意見に関連付けて話し合いができていた。単元として適切な発問や調査活動を組み込むことで「市場の町は本当に安全なのか」という大きな問いから主体的な問いをもち調査し事実を深める中で新たな問いを生みだしていた。最終的には子どもたちが社会参加することがこの一連の活動の中で見られた。そして「ふるさと科」として人とふれ合う中で、人との関わりを深めていた。参加することで、行動に移っていく。

さらに考えてほしいことは「鶴見ふるさと科」だから育てられること、9年間の系統性や小中一貫の教育の中で子ども資質・能力をどう育てていくのか、どう続けていくのか。義務教育段階の柔軟な教育課程の方向性(調整授業時数制度)で小1から中3まで指導要領が変わる中でのチャンスであるので、考えてほしい。中教審の「論点整理」ワーキングで考えられていることは「問いを生み出す」。そして、その問いに対して主体的に学んでいく姿だと考えている。答えはA Iで出ても問いを見つけられるのは人間だけである。「問い」を見出し自分で解決していくことは、これからの教育の示唆となる。

